SITES II
HERSETEC
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration SITES II
Nagoya University, Graduate School of Letters. Global COE Program

GCOE NEWSLETTER

国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

テクスト布置の解釈学的研究と教育

2008.9
No.3

CONTENTS

天野政千代教授の御逝去を悼む …… 02
グローバルCOE国際研究集会 …… 03
教育プログラム　2008年度前期講義科目の紹介 …… 04
研究活動　オープン・レクチャー …… 11
グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 12
海外出張報告 …… 14
名古屋大学グローバルCOEスタッフ紹介 …… 15
Report & Information …… 16

天野政千代教授の御逝去を悼む

6月13日昼頃、私は和田研究科長から天野先生ご逝去の報せを電話で受けた。突然のことで言葉もなかった。ちょうど一週間ほど前に、グローバルCOEの野田コーディネーターから天野さんからとして、検査のために入院するが心配しないようにとの伝言を受け取っていたからである。昨年の秋に一時入院された折りには、心臓に繋がる血管の閉塞が原因で体調不良になられたとうかがっていて、拡張のための措置を無事終えられたとのことであった。だから脳溢血が原因で急逝されたと聞き、まさに虚を衝かれる思いがした。

天野さんは昭和25年4月に秋田県でお生まれになった。享年58という若さでのご逝去である。秋田大学教育学部を経て、昭和50年に東北大学大学院文学研究科修士課程を優秀な成績で修了され、引き続き博士後期課程で研鑽を積まれたあと東北大学文学部の助手に採用された。その後広島大学総合科学部助教授を経て、昭和61年に名古屋大学文学部助教授になられた。平成11年には同研究科教授に昇任されている。ご専門は英語学で、平成10年にはご著書『英語二重目的語構文の統語構造に関する生成理論的研究』を、平成11年には『言語要素の認可―動詞・名詞句・副詞―』と、立て続けに労作を公刊し、平成11年度には斯界の卓越した業績に授与される市川三喜賞を受賞された。さらに学会活動では第7代日本英語学会会長を現職として務められ、近代英語協会副会長も歴任されている。また名古屋大学では高等研究院副院長の要職にあった。

天野さんと私は1年違いの名古屋大学着任であるから、約20年間を同僚として過ごしたことになる。ある時なにかの機会に天野さんのご出身が秋田県の男鹿半島であることを知り、山形県の庄内出身の私としては、故郷が割に近いことで、朧な親近感を抱いていた。だが単なる同じ組織の一員としての関係を越えて交流するようになったのは、平成14年から始まった21世紀COEプロジェクト「統合テクスト科学の構築」でご一緒するようになってからのことである。

このプロジェクトでは天野さんに第2回国際研究集会「言語テクストの創造と活用」（平成15年6月）および第6回「多重伝達形態論」（平成17年10月）の二度にわたりシンポジウムを組織していただいた。それぞれの主題の選択は、まさしく私どもの研究プロジェクトの核心を衝いたもので、言語部門のその後の研究の方向性を決定したと言ってよい。さらに貴重な貢献は、その後のグローバルCOEにも引き継がれることになるが、オーストラリア学派とでも差しあたり呼ばせていただくとして、そのテクスト文法の分野で先端を行くマイクル・オトゥール教授、デイヴィッド・バット博士など第一級の専門家を私どもの恒常的な研究協力者とする機会を与えてくれたことである。

故 天野政千代教授

平成19年から開始されたグローバルCOEでは、このシリーズの研究集会の先陣を切って、国際的な「歴史英語学」と共催で「英語歴史テクストの文献学的・文法論的研究」と題する集会を組織していただき、この2月には「テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る」をお世話いただいた。前者の報告集は間もなく国際的な学術書出版社ピーター・ラング社から出版される予定であり、後者は先のオトゥール教授の申し出により、同氏が天野さんへの哀悼の意味を籠めて編集に当たっている。

以上挙げた事柄だけでも、私どもの二つのCOEプログラムで天野さんがどれだけ大きな寄与を果たされたか歴然としている。

これら全てを、天野さんは自らの学問への無垢な愛情のしるしである屈託なさで、嬉々として取り組まれていたように私には見えた。そのことは間違いないと今でも思っているが、それとは別にもう一つ別の感情、いや感情と言っては正確さに欠ける内実、天野さんの人間的本領とでも言うべきものが彼の活動を支えていると思うようになった。彼の本領とは僭越を承知で言わせていただくなら、「義務感」である。学問を一歩でも先に進めようという義務感、一人でも優秀な後進を育てようとする義務感、共同研究を実りあるものにしなければならないという義務感である。私はその点に思い到ったとき、彼が急に身近な存在になった。今どき「義務の人」というのは流行らない。私とてこれ見よがしの自己犠牲的な滅私奉公には鼻白む思いがするし、願い下げにしたい。天野さんの場合は決してそんな印象は持たなかった。遙かに楽天的で、大らかな「大人びた」ものであった。天野政千代という人間の風韻と言ったらよいであろうか。

大人と言えば、私の勝手な思いこみであるが、天野さんの「大人らしさ」を印象づけられた機会が別にある。それは何かの折に名古屋駅前の飲み屋でご一緒した時に、何人かで小料理を注文した際、彼が煮魚に執着したことであった。私は概して魚が苦手である。外食して、特に煮魚を所望する人の気が知れない。しかし酒席での所作、とくに煮魚を食する作法を拝見しながら懐いた感慨は、あるいは短絡的かも知れないが、天野さんはつくづく大人だ、ということであった。

そうした天野さんは忽然と我々のもとを、ご家族のもとを去っていった。彼は大人らしく、多くの遺産を我々に遺し、また宿題も忘れなかった。さぁて、この宿題をどうするか。いまあらためて我々が天野さんを失ったことの重さを、痛感している。

天野さん、安らかにお休みください。あなたは義務を立派に果たされました。　　合掌

佐藤彰一（拠点リーダー）

グローバル COE 国際研究集会

GCOE 第４回 国際研究集会

日本における宗教テクストの諸位相と統辞法

2008年7月19日㊏－21日㊗
名古屋大学文系総合館 7F カンファレンスホール

阿部泰郎（学術責任者・文学研究科教授）

この研究集会は、人文学の先端研究として、人間の創出した文化の極致としての宗教を、テクスト学の立場から本格的に解明する試みであり、その豊かな諸相を示す日本における宗教テクストの世界を対象に、諸学横断的に探究する目的で企てられた。設定された領域は、宗教学と仏教学による「聖教」と「目録」、歴史学による「密教」、民俗学による「儀礼」、国文学による「和歌」、神道学による「神道」、美術史学による「図像」の6部門である。各部会は、それぞれの分野でテクスト研究を推進する第一人者を座長に招き、その企画の許で若手研究者の意欲的な報告を、招待と公募の双方の形式で撰び、これに中堅のコメンテーターを配して、各専門の最先端の研究成果を並列して提示することにより、自ずと相互に連環し交響し合うように配慮した。

集会は、拠点リーダー佐藤彰一教授の開催挨拶のもと、7月19日から21日までの三日間行われ、その前後に真福寺大須文庫の聖教調査研究の成果を展観とワークショップにより照会するプレ・カンファレンス（18日）と、伝統的な宗教儀礼の場における宗教テクストの諸相と機能を実地に体験するための北陸真宗寺院法会見学のエクスカーション（22～23日）を行って、総勢40名以上のメンバーによりプログラムが実施された。

なかでも、海外の代表的な日本宗教研究者による先端的な宗教テクスト研究の成果を、ルチア・ドルチェ教授（ロンドン大学・日本宗教研究センター長）とジャン・ノエル・ロベール教授（パリ高等学院・フランス学士院会員）に、日本語による基調講演として披露していただき、聴衆一同深い感銘を受けた。全日程の参加者はのべ350名を超え、各部会は熱気と興奮に包まれ、テクスト学に対する人文諸学の研究者の関心の高さがあらためて示された機会であった。

講義科目の紹介

本年度大学院博士後期課程に入学した方からは、課程博士論文を執筆して学位を取得するにあたりグローバルCOEが開講する授業科目から「テクスト布置解釈学原論」と「テクスト布置解釈学各論」を各2単位修得することが必要になりました。また、これらの授業への登録はグローバルCOEプログラムが推進する2つの事業に応募する際の条件となっています。昨年度以前に大学院博士後期課程に入学した方についても、グローバルCOE授業科目に登録し履修していることが、グローバルCOE論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件になっています。前期「テクスト布置解釈学原論」は、曜日・時限とも不定期に開講される30回以上の授業の中から自分の専門や興味にあわせて15回以上に出席し、レポートを提出することで単位を取得するという方式で開講しました。原論と各論の開講授業一覧についてはグローバルCOEのWeb（www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp）からPDFファイルをダウンロードして確認してください。

テクスト布置解釈学原論

2008年4月15日火・16日水

解釈学とテクスト

重見晋也 准教授（電子テクスト学）

本講義では、テクスト研究と解釈学の関係を概観するとともに、H. G. ガダマーの解釈学を対象としてその基本的な考え方を概観した。テクスト研究において解釈学はテクスト構造の分析を目的とする詩学の対極にある研究方法として位置づけることができる。ハイデガーに始まる現象学的解釈学は聖書解釈学にまでさかのぼる解釈学を批判的に継承したものであり、理論的には解釈学的循環を措定する点において共通している。解釈学的循環をどのようなものとして考えるかによりさまざまな立場があるが、ガダマーは知の蓄積が解釈者の理解を基礎づけており、テクストと知の蓄積との間の循環が解釈を生み意味作用を生むと考える。知の蓄積には社会的性質を持つ「権威」と個人的な経験としての「先入見」があり、それぞれが過去と現在の地平として解釈者の中で融合することで解釈学的意味作用が構成されていると考える。

2008年4月18日金

日本古代における法制史料と行政文書

古尾谷知浩 准教授（日本史学）

中国の隋・唐における律令法制定の歴史と、古代日本における、近江令から、飛鳥浄御原令、大宝律令・養老律令に至る律令継授の過程、詔・勅・太政官符などによる単行法令・施行細則の制定、格式の編纂、および『令義解』『令集解』など、律令注釈書の生成過程を整理して解説した。合わせて現存法制史料の伝存情況を説明し、その書式を比較検討した。その上で、法制史料の布置構造について概説した。

さらに、それを踏まえて、法規定に基づいて作成された行政文書につき、戸籍・計帳を例に、その作成過程を律令規定に基づいて整理して解説した。合わせて正倉院文書などとして伝存する戸籍・計帳類、および漆紙文書などの出土文字資料にみえる戸籍・計帳関係文書を通覧し、その書式を比較検討した。その上で、行政文書の布置構造について概説するとともに、法規定と、その運用のあり方や社会の実態との関係について解説した。

2008年4月21日月

解釈の隠された次元

森際康友 教授（法哲学・法曹倫理）

1. 誰が、何のために解釈するのか。解釈行為に焦点を当ててしまうと、この問いが捨象されがちである。しかし、解釈権限の問題は、解釈の理解にとって不可欠である。

2. 解釈にとって権力とは何か。解釈に大きな影響を与え、また、解釈（権）が大きな影響を与える権力というものに注目することが、テクスト布置解釈学には必要である。

3. 権力とは何か。それは少数者が多数をその意に反しても少数の意志に従わせる力をいう。その手段として、権力の正統性調達と暴力による担保という二つの要素がある。

4. 権力は悪か。人は権力を嫌いがちである。権力の本質を悪と見ている。が、それを本気で信じるならば、「人民による人民のための人民に対する」統治という民主主義、権力は正義を実現するためにあるとする「善玉権力観」が信じられないはずである。善玉権力はあり得ないか。

5. 権力はないよりもあった方がよいか。それは人間の尊厳を奪う不正な秩序でもアナーキーよりもましだ、という意味ではない。集合生活あるところ、権力が成立しないということ、アナーキーはあり得ない。現実的には、自然発生的な権力か、自覚的権力か、という選択しかない。自然発生的な権力は不正か堕落しがちであるので、自覚的に権力を樹立・変革することが必要である。

6. 善玉権力はあり得ないか。18世紀西欧に自覚的権力が生まれた。解釈という問題に即してその特質を見れば、それは共同体全体を拘束する公共的な決定と解釈の権限が、人民代表に、人民の利害（公益）に関する事柄についてのみ、公益を目標とする限りで、全面的に与えられる、とするものであった。それが人民主権である。善玉権力があり得るとすれば、これである。この権力は善玉たることを約束せずには存立し得ないからである。

7. よき権力による解釈とは何か。腐敗から自由な司法府における、司法の担い手たちによってこのような解釈が行われているはずである。そのような眼差しで司法的決定を考察すべきである。

2008年4月23日㈬

文化複合理解の人類学

和崎春日 教授（比較人文学）

儀礼テクストと複合社会との関係を考えた。メッセージの発信者のみならず、受信者も多い都市社会での儀礼テクストのあり方を考究した。そこで、都市社会の儀礼として、京都大文字五山送り火を取り上げた。まず発信者としての大文字保存会は、お盆の精霊送りの行事だと規定する。だが、都市には多様な住民が生活しており、その受け取り方は多様である。さらに、観光や信仰を目的とした旅人も、このときには何十万と押し寄せる。宗教儀礼性に充ちた送り火を観光旅行者は、綺麗な火として受け取る。点火の途端、ビルの屋上ビアホールで乾杯といった祝祭としての観賞姿勢もある。京都市交響楽団が大文字コンサートを行う。ガソリン大文字特価などという商業的便乗もでてくる。こうした現代的な祝祭的テクスト解釈もあれば、伝統的に行事を受けとる人びともいる。大文字五山点火と同時に、花火を打ち上げる町内がある。盆踊りを踊る町内もある。獅子舞を踊る町内がある。ご詠歌をうたう町内がある。こうした受け取り方は、祝祭的から信仰的まで、グラデーションのように連続的で遷移的である。つまり、こうして、人びとは、市民も旅人もともに、儀礼を多様に受けとめて多様に解釈し、複合的な多様な自らの大文字行為を作り出している。こうして巨大な儀礼テクストの維持エネルギーが生み出される。複合社会の儀礼は、多様な参加層に多様に意味づけられて、各人に活かされて生き続けていくのである。

2008年4月30日㈬

テクスト学と心的遠近法

高橋 亨 教授（日本文学）

はじめに「テクスト布置」の関係図式に基づいて、『源氏物語』というテクストをめぐる、パラテクストとしての〈紫式部〉、プレテクストとしての先行作品や注釈などのメタテクストについて総説する。次に、西洋のナラトロジーと『源氏物語』研究の立場からの「物語学」の共通性と差異について説き、「心的遠近法」理論の発想について説明を行う。具体的な教材として用いたのは、高橋亨『源氏物語の詩学――かな物語の生成と心的遠近法』（名古屋大学出版会、2007年）の序章三「物語の〈文法〉と心的遠近法」と二「貴種流離譚と物語の話型」の第2節以降である。

平安朝の物語作品における語りの枠の動態の基本図式に基づいて、物語場の表現構造を捉えることができる。語り手と聞き手が「昔」や「今は昔」といった冒頭表現、また「けり」といった助動詞によって過去の物語世界内に同化して入り込み、また物語世界内を異化してそこから語りの現在へと回帰する。その原型として異界と現世とを境界領域を媒介にして往還する話形の図式があり、それはシャーマニズムの想像力の飛翔型と憑霊型の組み合わせへと遡る。「心的遠近法」とは、物のけのように作中人物の心内までも転移する『源氏物語』の語りの方

法であり、それと共通する物語絵の文法としても一般化するための理論である。

2008年5月7日㈬

テクスト学の構築を目指して

阿部泰郎 教授（比較人文学）

宗教は、自らを構築する中核的な諸要素をすべからくテクストとして認知する志向を備えている。宗教は、聖典（聖なる書物）を己の拠とすべく創出し、イコン（聖なる図像）を介して豊かな世界像を示し、更にそれらは典礼（聖なる儀式）の過程において機能する。宗教が創りあげるカテゴリーとは、それらを悉くテクストとして解釈するならば、その輪郭に限らず、生成と変容の様相までも記述できよう。宗教という文化は、それをテクストとして概念化する象眼の許で座標上に位置付けることが試みられてよい。とりわけ永い歴史をもつ日本における宗教の世界は、民俗宗教と普遍宗教との間で受容と葛藤を繰り返し、その過程で混融変容して、多様な展開を示しており、複雑な事象に満ちている。それらの事象を分節し、その布置を認識する方法としてのテクスト学という網目格子（マトリックス）をもって解釈することが可能だろう。こうした問題意識をもって、さまざまな水準から日本の宗教について“読むこと”を試み、その解釈の響き合いの中で、共通する構造や一貫した法則を見いだす可能性について考察する。日本中世には、巨大な複合宗教テクストが形成されており、それらの所産は儀礼の場において、図像次元と文字次元、および儀礼化の位相と芸能（説話）化の位相に分節し、座標化される四象眼のなかに位置付けることができよう。日本の宗教テクストの豊かな世界を、この四座標象眼の仮説モデルに配してみるならば、そこに、一見限りなく変相する宗教事象を貫く“正中線”の如き座標軸を、もしくは仮想された軸線上に顕れる媒介的で典型となる宗教テクストにおいて見いだすことができよう。

2008年5月13日㈫・20日㈫

日本語研究の近代化と西洋哲学

釘貫 亨 教授（日本語学）

ソシュールのラングの理論を批判した時枝誠記は、行動主義的な「言語過程説」によって知られる。時枝は、自らの理論構築に際してフッサールの現象学を参照したことを表明しているが、それは経験に先立ってあらかじめ観察対象の存在を前提することを禁止する現象学の理論に時枝が共鳴したからである。時枝と同時期に日本語音声理論を主張した有坂秀世の「音韻＝目的観念説」も観察者の主体的経験を最も確かなものとして重視する「現象学的」論理構成を備えていた。時枝は有坂の音声理論に共感を表明している。

彼らより先に近代的文法学を確立した山田孝雄は、文、単語といった文法学の基本構成に関する定義に腐心した。山田は、「あるまとまりのある思想」を持つものが単語や文であり、何を以て思想の「まとまり」の要点とするかに関して「統覚作用」という概念を用いた。この概念は従来ヴントの心理学に借りたとされていたものであるが、より正確には哲学者カントの「先天的統覚」に拠ったものである。カントの哲学体系は、西洋形而上学の中枢を形成し、マッハやフッサールに強い影響を及ぼした。伝統的日本語研究の近代化に苦闘した山田、有坂、時枝の三人が既存の言語学ではなくともにカントを源とする西洋の形而上学に理論的な拠り所を求めた。彼らは、伝統的日本語研究の蓄積をもとに西洋の言語学を批判的に摂取した主体的な立場によって知られる。

2008年5月14日㈬

よき解釈とは何か

森際康友 教授（法哲学・法曹倫理）

1. よき権力とは何か。治安・正義など、政治権力によってしか実現できない公共財を実現する権力。

2. いかにして公共財を実現するか。公共財を実現するためにだけ存在する公権力という新しい権力形態を樹立することによって。その権限は、封建的権力と異なり、市民各自に及ぶものであるが、適用領域は、公共の福祉

（公共財実現）に必要な限り、と制約されている。

3. 公権力の濫用・腐敗にどう対処するか。公権力の正統性は、人民の利益・公益実現する唯一至高の権力（主権者）であることにのみ存する、と法定することによって。公権力は、この公約を裏切り、それを展開した法を破れば、支配の根拠がなくなる。この（雇われマダム）タイプの権力は、己のサバイバル・強化という私益を追求すればするほど、濫用・腐敗を避け、法を遵守して公益実現する。

4. 何をもって公権力の濫用・腐敗とするか。与えられた権限を越えて公権力を行使すれば濫用。公権力を私益のために用いれば、腐敗。権限踰越や汚職について法で規定されているが、具体的事件におけるその判断は簡単でない場合がある。その時、誰のどのような判断が最終的権威となるか。裁判所の法判断である。

5. 司法府による法判断とは何か。それは、“finding law on the merits of the case”という、立証と正しい推論に基づく、説得力のある規範的判断である。それは事件にかかる法に基づく判断である。が、法律の条文をテクストとするとは限らない。

6. 裁判において解釈はどのような役割を果たすか。法が明確に語らないからこそ裁判になるのだから、訴訟における判断は裁判官の個人的価値判断に見える。が、裁判官の法判断は、それまでの法実践と事件における個別の事実に基づく、理由のある判断であり、勝手な評価ではない。そこでの解釈の対象は、解決されるべき事件である。原告の請求に理由があるか、すなわち、原告の権利主張を国家が保護すべきか、が問題である。それに答えるのが、判決・決定を支える公共的理由である。

7. 法にとって解釈とは何か。正義という公共財を提供する公権力である裁判所は、法に基づく裁判を行うからその決定に権威がある。自然法は「書かれた理性 ratio scripta」と呼ばれたこともあったが、実定法とその解釈も公共的理由の記述である。公共的決定を正当化できる理由の体系こそ法であり、法解釈が法に権威と進歩を与える。

2008年5月20日㊋

歴史テクストの解釈学的特徴についての予備的考察

佐藤彰一 教授（西洋史学）

歴史テクストは過去に生じた出来事を記録した、いわゆる歴史記述と、時間的に過去に属する出来事を再構成するのに用いる記録に大別される。後者は必ずしも、過去の出来事を記した記録ではない。たとえば土地の賃貸借文書などは、作成された時点ではむしろ未来に属する事柄を内容としている。だが、歴史学の史料論ではこれらのテクストも過去を再構成するための重要なテクストとして扱われる。だがテクスト論の視点からすると、それは「歴史テクスト」とは別物である。歴史テクスト論が歴史学の史料論と袂を分かつのは、テクストが対象とする事柄が帰属する時制――表面的な時制ではなく、テクストの書き手が意識する時制として――のもつ重さの点においてである。

歴史テクストは過去という時間を対象とするために、記録の対象となる過去という時間性を認識論的に考察する必要がある。過去の時制への回路である「記憶」の問題を、プラトン、アリストテレスや聖アウグスティヌスの時間論によりながら検討した。

2008年5月26日㊊

封建制概念の解釈学的脱構築のためのアジェンダ

佐藤彰一 教授（西洋史学）

前回の授業テーマが時間不足で、充分に論じ尽くすことができなかったので、引き続き「歴史テクストの解釈学的特徴についての予備的考察」を論じた。

歴史テクストが過去の出来事を記述した記録体であり、たとえば目撃譚のような記録である場合、執筆者が事実を再構成する上で根源的な条件がある。それは自らの目撃したことを言語化し、記録するにあたって、直接の記憶に依存せざるを得ないということである。時間の経過のなかで、やがて同じ出来事を現場で見聞した人間が書き記した記録に接し、自らの記憶を正したり、別のレベルの記録を参照したりして、より客観的な記録として構築しようと試みることもあろう。だがこれは既に歴史の再構成、研究であり、歴史テクストとしての直接性は稀薄になっている。歴史テクストが、記憶を媒体とし

て、アリストテレスが言うように、過去の娘である「似像（エイコン）」が紡ぎ出す表象の言語化であるとするならば、過去表象の解読はコンテクストの変化によって容易に別様な言語化にいたるであろう。歴史テクストは記憶という表象解読を本質とする限り、現にあるテクスト（顕在テクスト）とその背後に潜み、書き手の内面で生じるコンテクストのゆらぎによって顕在化する可能性をもった無数の潜勢テクストの総体とみなすことができる。

2008年5月28日㈬・6月25日㈬

ホメロスの口誦詩と文字使用

小川正廣 教授（西洋史学）

紀元前8世紀頃のギリシア詩人ホメロスの作と伝えられる叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』は、現存の状態では合わせてほぼ27,000行の古代ギリシア語テクストを構成しているが、その成立に関しては古来大きな謎として人々の想像をかきたててきた。

まずホメロスの物語の神話的題材に関しては、シュリーマンのトロイア発掘以来１世紀以上を経た現在、ミュケナイ文明の進展と広がりを歴史的コンテクストとして定置することができる。しかし、まだなお解明すべき問題は、ミュケナイ時代のあとに成立したホメロスの膨大なテクストそのものの生成のプロセスである。紀元前８世紀後半には、ギリシア世界ですでにアルファベット（音素文字）の使用が始まっていた。伝統的な口誦詩（オーラル・ポエトリ）の特徴が濃厚な現存のホメロスのテクストの創造と初期の伝承に対して、この新たな文字ははたして何らかの形で関与したのか。

こうした問題をめぐって、最初にミルマン・パリのフォーミュラ理論を点検しながら、非文字テクストの生成のメカニズムを明らかにする。次に非文字テクストに対する文字の作用について探り、文字使用がホメロスの詩の伝承のどのような段階から関わったのかという点に対して、テクストそのものに内在する言語的特徴を手がかりにして考えてみる。なお受講生はギリシア語やギリシア文学について特別な知識がなくても授業の内容を理解できるよう、さまざまな視覚資料も用いて講述する。また日本文化に関心をもつ学生なら、『古事記』の成立や本居宣長の文献学的研究ともつうじる問題を見いだすことができるだろう。

テクスト布置解釈学各論

各論Ⅰ●歴史テクスト

佐藤彰一● 歴史学のみならず、人文科学の理論全体においても重要な意味をもつ「封建制」という概念を、テクスト論の観点から脱構築することがプロジェクトの狙いであり、講義内容はその予備的作業を試論的に提示することであった。

脱構築作業は、まず封建制概念がどのような歴史的モデルを鋳型として形成されたかを、概念史的に明らかにするところから出発する。日本語でいう「封建制」とヨーロッパの「ヒューダリズム」の差異を正確に認識する必要がある。日本語の「封建制」は、中国古代の国家統治の様式であった「封建制」を概念上の淵源としており、中央からの統制のもとに地方を統治する方式である「郡県制」の対概念である。ここにすでに「ヒューダリズム」との明瞭かつ無視できないズレが見てとれる。日本語で言う「封建制」概念の地平には、参照枠としての「国家」が組み込まれているのに、ヨーロッパの「ヒューダリズム」には、たとえば最も有名な中世史家マルク・ブロックの構想を例にとるならば、それは国家機構の存在を前提としていない。むしろ国家が体現する公的秩序不在の時代に機能し、秩序を代替する役割をになったシステムと考えられているのである。この意味論上の格差は重大であり、封建制とヒューダリズムは決して同義の概念ではないことが、この一事をもってしても直ちに納得されよう。

ヨーロッパの封建制概念の脱構築をめざす私の議論は、それゆえヨーロッパのヒューダリズム概念の形成史となるわけだが、留意しなければならないのは、日本の近代歴史学において「封建制」の概念を用いる際、人々の念頭にあったのは明治期の啓蒙史学において共通の認識となっていた「郡県制」の対抗概念であった「封建制」ではなく、実は「ヒューダリズム」の翻訳語としての「封建制」であったという複雑なネジレ現象である。したがって学問用語としての「封建制」の脱構築のためには、いずれにしてもヨーロッパのヒューダリズムを対象にするのが有効な作業となる。

講義では中世ヨーロッパでの封建制の古典的理解を解説し、ついで近年ヒューダリズム概念の有効性を根底から覆す議論を展開し国際的な反響を呼んだスーザン・レノルズの論を紹介し、翻ってヒューダリズムの基底にあるフェウドゥム（feudum）を、法学的に根拠づけた最初の著作である13世紀の『知行の書』およびこれを解説した16世紀の人文主義者の理解、モンテスキュー、ヴォルテールら啓蒙思想家のヒューダリズム論、カール・マルクスのインパクト、19～20世紀ドイツ歴史学におけるヒューダリズム論、マルク・ブロックの論、第二次世界大戦後のヒューダリズム概念等を紹介し、今後の展望を示した。

各論Ⅱ 文学テクスト

高橋 亨 ● はじめに、テクスト布置と解釈学について、担当者それぞれの立場から、導入として説明した。各論の個別としては、平安朝の物語と絵と歌の関係について、『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』など、王朝物語の歴史的な展開を示した。また、平安朝物語絵の特徴として、引目鉤鼻による顔貌表現と吹抜屋台による室内表現などを説明したうえで、『源氏物語』と源氏絵を中心に、テクスト論の視点から論じた。

また、源氏絵の具体例について、パワーポイントによる画像や書物の図版によって示し、絵巻・冊子・画帖・掛け軸といったテクストの形態の差異、また、肉筆と版本、彩色と白描などの差異について概説した。

高橋の担当部分の参考資料として、『源氏物語の詩学』第Ⅲ部第3章の「物語と絵巻物――源氏物語の時空」をコピーして配布し、これにそって授業をすすめた。その主な内容は、(1)物語と絵巻物の〈文法〉、(2)語り手と視点人物、(3)物語絵と雛と女君たち、(4)物語の男にとっての絵と人形、(5)中心と周縁の〈文法〉と物のけ、(6)物語絵の正典化と王朝〈女〉文化の伝統、(7)源氏物語の内なる絵画史である。

授業の参加者には、この論文を参考にして、各自の研究の専門領域をふまえて、テクスト論の視点から考察することを求めて討議した。

最後に、源氏屏風や画帖を具体的に見学する機会を用意して、希望者による個別参加として、意見を交換した。

阿部泰郎 ● 宗教の領域こそは、他にもすぐれてテクストを創出することによって自らを形象しようとする運動体である。換言すれば、宗教という現象を、悉くテクストとして捉えようと試みることが可能である。そのカテゴリーを、全てテクストという視座において体系的に認識することは、テクスト学の課題であり実践に他ならない。豊かな展開とその所産を示す日本の宗教について、これを聖典、目録、経蔵（宝蔵）、儀礼、図像という対象と視点から、具体的に検証する。

聖典という〈聖なるテクスト〉の超越性と越境性について、時空や言語を超えて展開を志向する動きと、絶えず解釈と自己言及を反復する動きについて指摘し、反面で文字の呪性と書かれ、読まれる機能から発現する神秘化と限りない荘厳の運動について、ケルズの書と平家納経を例に挙げて論ずる。次に目録というテクスト集合の座標（マトリックス）を、一切経から章疏そして聖教という中国・および日本仏教の宗教テクストの展開において果たした役割から見渡し、それら目録に可視化されたテクストが、国家ないし王権の許で経蔵ないし宝蔵という場（トポス）に収集、分類されて相乗的に権威を創出する装置となることを、蓮華王院宝蔵目録や守覚法親王の各種目録とテクスト編纂の営為を通して論ずる。

密教において顕著な儀礼創出とテクスト生成の双方向での不可分性を、文観による三尊合行法聖教を素材として分析を試み、空海の御遺告という新たな聖典の注釈と本尊図像の創案が中世密教の到達点であり、また彼の王権図像である後醍醐天皇御影と瑜祇経灌頂の儀礼および瑜祇経注釈と図像創出の密接な関係について論じた。最後に聖徳太子をめぐる図像学について、その尊像と講式および絵伝と太子伝という中世に形成された儀礼を含む図像体系を座標化し、そのイコン複合が説話図像としての絵伝における壮大な複合図像体系にまで展開することを論じた。

なお、本講義は講師が学術責任者を務めたグローバルCOE 第4回国際研究集会「日本における宗教テクストの諸位相と統辞法」の序説というべき役割を果たした。

鎌田隆行 ● テクスト布置という観点から考察すべき「テクスト」とは、手稿から印刷本に至るまで様々な媒体の物質性を纏い、社会的・文化的コンテクストの作用を受けながら生成し、流通し、受容されていく本質体である。

各論Ⅱ●文学テクスト

かつてロラン・バルトの流れを汲む「テクスト論」が提唱したようにテクストから作者や歴史性を追放してしまうのではなく、相互に緊密に結びついている「作者」概念、テクストの物質性、文学的表象の様態、受容主体等からなる布置構造を歴史的視座のもとに理解していくことこそが、人間の文学的営為を総体的に捉えなおし、さらには伝統的な作者像の揺らぎ、読者の役割の拡大、著作権問題といった書記文化の今日的な問題の考察の深化をも可能ならしめる。こうした観点から、本講義ではパラテクスト（序文的言説、題名、作者名、支持体など）の多様な現れとその機能の問題に特化し、G. ジュネットの『スイユ』を参照しつつ、フランスおよび日本の近代文学の事例を取り上げて論じた。

文学テクストが読まれるにあたっては、それがいかなる媒体に載せられ、いかなるフォーマットで、いかなる構成を取っているかが読者の読解に影響を与える。ペーパーバックや文庫本の「聖別」機能（廉価本として多くの読者を対象として再版されるに値する評価を得た著作、という位置づけを与える）などはその好例である。

他方、作者による序文的言説の機能についても概観した。序文、後書き、献辞文などの広義の序文的テクストは、主として 1) 作品の価値の主張、2) 読解の方向付け、という二つの機能を担う。例えばフランスの19世紀前半のように小説が未だ本格的な文学の一ジャンルとして認知されていない時代には、受容への不安を反映し、作品の価値を正当化する様々な序文戦略（特にテクストの真実性を強調する言説）への依拠という特徴が見られるのである。

各論Ⅲ●言語テクスト

釘貫 亨● 日本は、5世紀に漢字を受け入れて以来、7世紀末から8世紀初頭にかけての東アジアの国際情勢を受けて歴史上初めて国家を建設するに至った。これと同時に日本社会は、行政が文書に基づいて行われる文字社会の段階に到達した。文字に反映した日本語的特徴は、最初は人名地名を表記した仮名表記に現れたが、律令国家は天皇の口頭伝達（宣命）を転記するために仮名を助辞表記に転用した。これを当時の官人達は叙情歌の表記に応用した（和歌）。宣命と和歌の表記で完成した日本語表記は、太宰府歌壇と越中歌壇に於ける総仮名表記にいたって極限形態を実現し、やがて平安王朝文芸の平仮名へと向かう素地を形成した。

＊　＊　＊

日本の文字社会の中核に位置する漢字は、古代に於いては貴族及びその文化圏に連なる僧侶の専有物であったが、鎌倉時代を境にして漢字の知識が仏教を媒介にして民衆に下降し始めるという現象が出来した。親鸞は、自らの信仰についての深奥を極めた著述には漢文を使用したが（『浄土三部経註釈』、『教行信証』）、民衆を教化する目的の文献に於いては、漢字片仮名交じり文を使用し、しかも漢字の部分には徹底的に振り仮名を施した（『西方指南抄』、『三帖和讃』）。これは、法座に於ける浄土教の教理を口頭伝達することを念頭に置いた書式である。鎌倉時代以来、啓蒙的な文献に於いて漢字に降り仮名を施すのは通常の書式であり、近世における大衆的出版物に於いてもかかる書式が踏襲された。近世後期は、行政の他、商工業や農業でも文書実務が常態化して、文字社会は極めて大衆的に拡大した。近世文字社会の中核に於いても古代、中世と同様に漢字の存在があった。幕末期に前島密が徳川慶喜に建白した画期的な国字改革案である『漢字御廃止之儀』が日の目を見なかった原因の一つが、大衆社会に拡大した漢字文化であったことは注目すべき事柄である。漢字は日本人の文字生活に負荷を掛ける一方で、抽象的概念の表示に適しており、18世紀以来、押し寄せていた西洋文化を漢字によって翻訳し、理解を容易にしたことが日本の近代化に貢献した。

町田 健● 言語テクストは、その基礎的単位である文が、一定の構造に従って配列されることによって構築される。文の表示する事態を構造に従って合成することにより、テクストの意味が導出される。テクストの意味を正確に理解する、すなわちテクスト作成者が意図した意味を再現するためには、事態が成立する状況と事態の構成要素との関連を厳密に見極める必要があると同時に、文の構造と文が表示する事態との関係を理論的な観点から論じることも必要となる。本講義では、これらの問題に対して、真に論理的な手法で接近することを目的として、Richard Montague の提示した形式意味論における、状況を組み入れた事態理解の論理学的方法を議論するとともに、論理学者 Quine の理論的統語論に対する論理学の観点からの批判的検討に関する論考を題材として、論理学的意味論の言語学に対する貢献とその問題点を論じた。

オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムでは21世紀COEプログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバルCOEが名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバルCOEオフィスで、「テクスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当者の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2008年4月から開催した3回の要旨を紹介します。

第7回 宗教図像テクスト複合としての聖徳太子絵伝

2008年4月16日(水) 18時—19時

阿部泰郎 教授（名古屋大学大学院文学研究科・比較人文学）

日本独自の説話画として永い歴史と豊富な作例を有する聖徳太子絵伝は、聖徳太子の伝記という文学テクストを、絵解きという音声—語りを介して表象し意味付ける機能を蔵した図像テクストである。この太子絵伝は、中世を中心とした各時代の仏教の儀礼空間において、本尊としての太子尊像と、太子講式などの儀礼テクストにより太子を祀る祭式を営む、各宗派の唱導と教化の一環として、芸能的性格をもって運用された。太子絵伝は、いわゆる“太子信仰”を構成する諸位相の要素が重層し連携した接点の媒体として成立し、機能するものであった。その機能を、共時的な構造と通時的な変遷の両面から明らかにすることを通じて、それらの全体を広義の宗教テクストとして認識する必要があることを提起した。

第8回 ソシュールと解釈学

2008年5月21日(水) 18時—19時

松澤和宏 教授（名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学）

ソシュールは記号論、および共時言語学の創始者としてもっぱら後世に名を残すことになったが、ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』は弟子たちによる改竄的編輯の所産であり、ソシュールの手による著作ではない。ソシュールの草稿と『一般言語学講義』との大きな相違の一つは、ソシュールが「共時的体系」をあらかじめ固定したものとは考えていなかったことである。例えばソシュールが「省略」という日常的な言語現象の裡に「価値の過剰」を看取していたことの裡にも十分に窺うことができる。しかし変動して止まない価値の体系が、その「恣意性」にもかかわらず相対的に安定しているのは何故であろうか。ソシュールは、不可視の伝統的時間の効果をそこに見出している。歴史言語学が扱う日付の付された歴史的変化の時間とは異なって、言語を言語たらしめている時間は、社会的な伝達・流布に加えて世代から世代への伝承に内在する時間である。この伝統的時間の裡にこそ記号と言語体系の正当化の根拠があるとソシュールは考えた。言語のいかなる解釈も、この伝統的時間を暗黙の前提としているのであり、したがってこの時間は科学の一対象ではなく、科学の前提をなすものである。そこに「解釈学的循環」が顕在化し、演繹的な理論体系の成立不可能性が壁のように立ちはだかることになる。言語の一般理論に関する「書物」が1890年代に構想されたものの、数年後に結局断念・放棄された理由もそこにある。

第9回 Visualizing Cultures: 視覚を通して見た歴史

2008年6月18日(水) 18時—19時

宮川 繁 グローバルCOE特任教授（マサチュセッツ工科大学言語文化学科・言語学）

歴史学は、主に文章で書かれた資料を分析する。マサチューセッツ工科大学では、2002年から、Visualizing Culturesというプロジェクトが行われており、伝統的なアプローチでは無視されてきた、歴史的に貴重な画像を中心に歴史を考える試みをしている。「敗北を抱きしめて」でピュリッツァー賞を受賞したジョンW.ダワー歴史学者との共同プロジェクトで、ボストン美術館、スミスソニアン美術館、広島原爆資料館、資生堂など、貴重な画像のコレクションを所有しているところと提携しながら、視覚を通して見た歴史学を開発している。

グローバル COE 研究員 ブリーフィング ②

グローバル COE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテクスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバル COE オフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

金銀珠 ● 日本語における主格助詞「の」の歴史的展開

日本語テクスト構文内に現れる主格助詞「の」の歴史的展開の様子とその言語内的要因を解明することを目的とし、そのために必要な研究課題を整理した。それには通時的観点から、「の」が現れる全体的な句の特徴なり差なりを総体的に観察し、その有機的関連性を把握すること、「が」が用いられる例との総体的な比較が必要であること、現代語の連体修飾節における主格助詞「の」が用いられる理由を歴史的観点から解明すること、の三点の考察が必要であるとした。このような将来的展望を提示した後、特に最後に挙げた現代語の連体修飾節において「の」が主格助詞として現れる理由について考察した。現代語の連体修飾節においては「髪の長い女」「髪が長い女」のように主語を表示する「の」「が」の2種類の助詞が使用される。現代語の一般的な主語表示は「が」が担当するが、連体節に限っては「の」で主語を表示することができる。現代語においてこのような「の」が現れるのはなぜかについて、中古語における主語を表示する助詞「の」が現れる構文を意味役割分担という観点から考察し、現代語の連体節において「の」が現れる構文の意味的構文的特徴と比較した。その結果、現代語の連体節における助詞「の」は中古語における準体法の役割を担ってきている可能性がある、というのが現段階で発表者が到達した一応の見通しである。ただし、これは歴史的な検証を経なければならない問題であり、細部の検証は行われていない。今後の課題とした。

小澤 実 ● 政治的表徴としてのルーン石碑――テクスト解釈からコンテクスト解釈へ

本発表の目的は、ルーン石碑を歴史学に応用する方法論の模索にある。歴史家 B. Sawyer は「モノ」としてのルーン石碑に注目し、なぜルーン石碑が建立されたのかというコンテクストに関わる問いを立てた。彼女の結論は、ルーン石碑は、その石碑を建立させた生者の土地所有権を共同体に向けて主張する機能をもつということであった。これに対し発表者は、紀元千年前後のスカンディナヴィア諸国は流動性の高い社会であったというコンテクストを考慮するならば、ルーン石碑には対抗する在地有力者間の一種の存在証明として機能があったと考える。資金を持つものは他の石碑よりも視認者に訴えかける石碑を作成することが可能である。発表者は具体的分析の領域として、1. テクストの差異化、2. 石碑それ自体の差異化、3. 設置空間の差異化（自然空間、文化空間、モニュメント化）、4. 社会コンテクストの変化、を提起した。

谷部真吾 ● 高度経済成長期における祭りの変化――遠州・森の祭りの終戦後［1974年を事例として］

本発表では、静岡県周智郡森町で行なわれる「森の祭り」の第2次大戦後から1974年（昭和49）までを事例として取り上げた。この当時の森の祭りは、「森の『けんか』祭り」とも呼ばれ、参加者同士のけんかや屋台引き回し違反などの絶えない、非常に荒々しい祭りであったとされている。そのため、この祭りは、警察・行政・学校などの外部機関から暴力的・不法的・非教育的であり、改められるべき祭りとして位置づけられてしまった。こうした外部機関からの要請を受け、森の祭り側は、当時の運営組織を中心に祭りをより穏やかものにしようとさまざまな対策を講じたが、その効果はほとんど上がらなかった。そうしたなか、不幸にして、1969年（昭和44）には警察官殴打事件が、1973年には2件の死亡事故が起きてしまう。事態を重く見た一部の関係者たちは、改革委員会を立ち上げ、森の祭りの改革に乗り出した。彼らの努力は1974年に実を結び、森の祭りは「けんか」祭りからの脱却を果たすこととなった。本発表では、以上のような森の祭りの変容プロセスを詳細に報告した上で、この祭りの変化がその非日常性にどのような影響をおよぼしたのか、さらには、こうした変化を成立せしめた当時の社会的風潮とはいかなるものであったのか、について考察した。

西村善矢●中世初期イタリアの証書（カルタ）とその利用――テクストの内側と外側

中世初期イタリアで大量に産出された文字テクストの一つに、カルタ（charta）とよばれる証書、すなわち土地財産の権利移転にさいして作成された「私文書」がある。カロリング時代のカルタを特徴づけるのは、その形式が高度に構造化している点、そしてその契約類型が売却、贈与、交換、貸借とわずか4種類に限られる点である。定型的で種類の乏しい証書は、当時の人びとのさまざまな社会的、経済的要請にいかに応えることができたのであろうか。

羊皮紙に書かれた証書テクストの下には、定式化されたテクストの枠内では盛り込むことのできない情報を記すことがしばしばあった。このような、狭義の意味でのテクストの外側にある部分に注目することが、上記の文書利用をめぐる問題を解く手がかりの一つとなるように思われる。8世紀から11世紀の南トスカーナで作成された証書を素材として、テクストの内側と外側にあるものの関係を見極めること、それが今後の私の課題である。

前澤大樹●形容詞修飾と不連続 AP 構文

本発表では、形容詞による名詞の修飾に於いて、しばしば対比的な意味的・語用論的機能を示す名詞前位形容詞と名詞後位形容詞の、構造を始めとした統語的な差異を明らかにするために、特定の条件下のみで許される（1a）のような不連続 AP 構文を特に取り上げ、いわゆる主要部終端効果と相容れ難く思われるその振る舞いと、分布に課された制約を説明することを試みた。形容詞修飾の分析が説明すべき一般化である主要部終端効果を扱うために、名詞前位形容詞に NP 上位の主要部としての地位を与える Abney（1987）のような分析を基本的に受け入れつつ、本発表では、不連続 AP 構文に見られる名詞前位形容詞は、（1b）に示すように後位修飾構文の基底構造から主要部 NP の繰上げによっても派生されたものであると主張した。この分析はまた、不連続 AP 構文が許されるのは非対格型の中でも繰上げ型に限られるという一般化を適切に説明できることを示した。

(1) a. a similar car to mine (cf. a car [AP similar to mine])
b. [DP a [aP [NP car]i a [AP similar [PP ti to mine]]]]

永田道弘●大衆小説の布置――レーモン・ルーセル『アフリカの印象』と同時代の植民地小説

前回のブリーフィングに引き続いて、レーモン・ルーセルの『アフリカの印象』の生成過程を分析した。今回の発表では、フーコーらのように記号論的システムといったあまりに一般的な次元でルーセルの作品に現実批判を読むのではなく、生成過程の中で生じた荒唐無稽なアフリカが、具体的にどのような方向で西洋におけるアフリカの表象の閉域を脱出しえたのかを見るために、ルーセルと同時代のアフリカを扱った通俗小説によって形作られる布置の中に彼の小説を定位し、それらの作品との間の類似や差異を同定することを試みた。このようなアプローチで明らかになった点は、ルーセルが既存のそれぞれの小説モデルの要素を部分的に借用しつつも、どれか特定のタイプの植民地小説を志向するのではなく、どれからも距離をおいたポジションで自身の作品のオリジナリティを追及したということである。そしてこのオリジナリティは、黒人王の人物像――女装して歌を歌うアンドロギュノス的な存在――で特に顕著なものとなる。この女装した黒人王の表象は、植民地主義が自明のものとしている人種化されたセクシュアリティ（西洋＝男性／非西洋＝女性）の図式を一時的に宙吊りにすることで、一種のイデオロギー批判の可能性をも胚胎しているとも考えられる。

海外出張報告

ソウル国会図書館

金銀珠

2008年2月15日から2月17日まで、2泊3日間、韓国のソウルに位置する「国会図書館」（1 Uisadangno, southwest Seoul）を訪問し、研究に必要な資料を収集した。
交通便は中部国際空港と韓国のインチョン国際空港の往復で、アジアナ航空（韓国）を利用した。また、現地での宿泊は訪問先に近いホテル（kobosu hotel：+82-2-782-9092）を利用した。
韓国国立国会図書館は、韓国最大の図書館として、1945年以降韓国の大学に提出されたすべての修士・博士論文、雑誌などの定期刊行物、専門書籍等を所蔵している。報告者が収拾した資料は、中世韓国語の連体修飾に関する雑誌論文および韓国大学に提出された博士論文である。この資料は、現在進行中の日本語の属格主語に関する研究との対象研究に使用する。より具体的にいえば、日本語には「髪の長い女」「雨の降る日」のような名詞を修飾する構造において属格主語「の」が現れることがある。韓国語の属格を表す助詞には [ui] がある。日本語のように名詞を修飾する構造において属格が主語を表示する例は、現在の韓国語にはまれに起こる現象であるが、中世韓国語ではより頻繁に行われていたことが知られている。属格主語は言語的にみれば、さほどまれな現象であるとは言えないが、韓国語と日本語は構文構造が近似しており、日本語の属格主語が使われる範囲も韓国語と同様、次第に狭められてきていることが知られている。したがって、日本語の属格主語の変遷に関する言語内的要因の解明に、韓国語の変遷は示唆的な材料になると考えられる。本調査の分析結果については、今後グローバル COE の研究事業の中で論文化していく予定である。

（グローバルCOE研究員・日本語学）

フランス国会図書館における調査 ── レーモン・ルーセル『アフリカの印象』の作品生成資料の転写および分析

永田道弘

フランス人作家レーモン・ルーセル（1877–1933）の執筆による小説『アフリカの印象』の手書き原稿およびタイプ原稿の一部を転写。作品が成立するプロセスとしての前テクストを分析対象とすることは、本プログラムが掲げる「テクストの布置構造」という観点からいえば、従来の決定稿に依拠した作品解釈を相対化し、より広範な意味生成システムとしてのテクストへのアプローチを可能にするものといえる。これはルーセルの『アフリカの印象』の場合にもあてはまる。ミッシェル・フーコーらが試みてきたルーセルのテクストのフォルマリスト的解釈は、この作家を歴史の闇から救い出した意義は少なくはないが、現在ではその発想への呪縛がルーセル研究にマイナスに作用しているといえる。『アフリカの印象』の生成プロセスをみれば、フーコーらが主張するように、言語遊戯に類似した抽象的論理だけを頼ってルーセルが小説を書いたわけではないことが判明する。今回のフランス国立図書館での調査においては、以上の方向性で研究を深化させることができただけでなく、広義の引用関係としての間テクストの視点を導入することで、一つの作業仮説 ──同時代のアフリカの表象に対してルーセルが加えた変成作用の特異性が、西欧植民地主義のイデオロギーを転倒させる契機を孕んでいる ──を打ち立てることができた。今後は、転写した草稿をもとに、この仮説の証明を試みていきたい。（2008年3月12日～27日）

（グローバルCOE研究員・フランス文学）

シンポジウム「バルザックのマテリアリズム」／バルザックの作品生成資料の調査（フランス）

鎌田隆行

5月27日～6月3日、フランス・パリに出張し、シンポジウム「バルザックのマテリアリズム」にて研究報告を行い、またフランス学士院図書館でバルザック『セザール・ビロトー』の作品生成資料を調査した。
フランス学士院図書館ではロヴァンジュール文庫所収の同作品の草稿および校正刷りを閲覧した。全体で千ページ以上に及ぶ膨大な資料体であり、作中に見られる複数の架空の広告文の生成に焦点をあて、関係箇所の解読と転写を行なった。
シンポジウム「バルザックのマテリアリズム」（5月30日～31日）は国際バルザック研究会(Groupe International de Recherches Balzaciennes)の主催によるもので、パリ16区のバルザック記念館の図書室が会場となった。同研究会では毎年決まったテーマのもとに通年のセミナーとシンポジウムを開催するのが定例となっている。近年はバルザックの初期作品や、これまでに研究・批評の対象になることが少なかった「分析的研究」を取り上げ、この作家の膨大な作品群をより包括的に理解しようとする試みがなされてきたが、今回はその延長線上で、ジャック=ダヴィッド・エブギー氏（ナンシー第2大学）をオルガナイザーとし、バルザックにおけるマテリアリズムの現れを多角的に考察することを目的としたものである。フランスおよびヨーロッパ諸国の主要なバルザック研究者を中心に、両日あわせてのべ50人ほどの出席者があり、発表者の多くは主に哲学的概念としてのマテリアリズムを分析の対象とし、「哲学者バルザック」と「小説家バルザック」が交錯するテクスト空間として『人間喜劇』を捉えなおす刺激的な論考を提示した。拙論はむしろ美学的な見地からバルザックのマテリアリズムを考察することを試み、バルザックがその作品制作の実践的局面において草稿や校正刷りという支持体の特性を強く意識し、印刷業の経験で得たノウハウを活かしながら独自の詩学を開拓していったことを『セザール・ビロトー』のフィノの広告文の変容を例にとって生成論的アプローチによって論証した。

（事業推進担当者・フランス文学）

交流プログラムおよび国際研究集会準備の旅

佐藤彰一

6月18日から27日にかけてヨーロッパに出張し、フランス、イギリス、ベルギーを訪問した。ミッションは三重である。第一がプロヴァンス大学との大学院レベルの研究と教育に関する協定の打診。第二が西洋中世歴史テクストの解釈学研究に関するフランス、イギリス、ベルギーの研究者との意見交換。三番目のミッションが、2009年3月に開催予定の国際研究集会「西洋中世テクストの解釈学と参照体系」（仮題）の海外招聘報告者の人選と打合わせである。
去る5月にプロヴァンス大学の国際交流担当副学長ジャン=クロード・アブリック教授を責任者とする交流担当スタッフが来日し、幾つかの大学を表敬訪問されたが、私どもグローバル COE 執行部とも歓談する機会があった。これを承けて、6月19日に現地で落ち合った重見准教授とともに、午後2時過ぎからプロヴァンス大学の会議室で文学系大学院（Ecole doctorale “Langues, Lettres et Arts”）の責任者であるファンロー教授をはじめとする、同大学院の3名ほどの教員を交えての会議に臨んだ。この会議の内容については、技術統括責任者である重見准教授の稿に譲りたい。
第二のミッションである西洋中世歴史テクストの解釈学的研究についての意見交換は、パリ第4大学のミシェル・ソー、ドミニク・バルテルミィ、ジャン・ガスクの諸教授、ソルボンヌ高等研究院ジャン=ルー・ルメートル教授、コレージュ・ド・フランス名誉教授ピエール・トゥベール氏などと個別にアポイントメントを取って行なわれた。いずれの諸氏も名古屋大学をすでに訪れ講演や授業を行なうか、COEの国際研究集会に参加した経験があり、私どもの研究環境や、COEの目指すところを知悉している方々である。私が研究の進展状況と大学院教育の新機軸として立ち上げた授業について行なった説明に対して、フランスでの大学院教育の改革を踏まえて、有益なコメントと助言を得ることができた。バルテルミィ教授は2009年7月に一ヶ月滞在して、大学院向けの授業（英語）を担当することを快諾してくれた。教授は来年の授業で日本中世の武士社会についての講義をソルボンヌで比較史的見地から講ずる予定とのことで、日欧の戦士文化の中での文字記録の機能に、新たな光が当てられるものと期待される。
第三の課題は上記国際研究集会の主旨を説明した上で、そこでの報告を承諾して貰うことであった。私が選んだのはオクスフォード大学オールソールズ学寮チチェーレ歴史講座担当教授クリス・ウイッカム氏、パリ第4大学教授ジャン・ガスク氏、ナミュール大学講師エチエンヌ・ルナール氏、パリ高等師範学校教授フランソワ・ムナン氏、パリ第1大学講師スミ・シマハラ氏である。幸いすべての候補者が報告を快諾し、招聘に応じてくれた。ウイッカム教授は現在世界のヨーロッパ中世史学のトップに位置し、最も精力的かつ大胆に歴史像を書き換える作業を行なっていることを知らない研究者はいない。ガスク教授はパピルス学、ビザンツ史の泰斗であり、最近イエルサレム司教ソフォロニウスが著した『聖キルスおよび聖ヨハネス奇蹟譚』の校訂本を出版し、聖人伝テクストの解釈

学に新生面を開いた。ルナール氏はカロリング期の大所領関連記録の専門家で、伝統あるベルギーの中世史研究の次代をになう一人である。ムナン氏はイタリア中世史研究の大御所トゥベール教授の門下生で、中世ロンバルディア地方に関する大著で有名であり、多様な類型の文字記録で抜きん出ているイタリアのエキスパート。スミ・シマハラ氏は、フランスの若手の女性中世史家では最も嘱望される一人で、古くはマルク・ブロック、近くは先述のドミニク・バルテルミー教授も選ばれたことのある、超難関のティエール財団給費生に採用された才媛である。彼女は『オーセールのエイモンの著作における注解と政治』と題する見事な学位論文を2006年に提出し、最高の評価で合格した。聖書注解という解釈学の中の解釈学とも称すべき、わが国の研究者の層が決して厚くない分野に、新たな知的刺戟がもたらされることが期待される。

出張の全期間にわたって、大陸もイングランドも素晴らしい晴天で、温度計が30度に達しない日はなかった。この猛暑のなかで午前にオクスフォードで、夕刻にベルギーでまた打合わせという強行スケジュールであったが、こうした日程もユーロスターがあったればこそである。その利便性に感謝すると同時に、料金の高さにはほとほと呆れた。ホテルも同様である。ユーロ高、ポンド高が背景にあり、実物比較で言うと50パーセントから70パーセントが為替レートによる水増しである。40年前、1ドル360円時代に2年間フランスで生活した経験を、フト思い出した出張であった。

（拠点リーダー・西洋史学）

フランス・プロヴァンス大学訪問

重見晋也

2008年6月17日から21日までの期間、グローバルCOEプログラム『テクスト布置の解釈学的研究と教育』とフランス・プロヴァンス大学との間に学術交流・学生交流の協定を締結するべく、フランス・プロヴァンス大学を訪問した。6月19日14時30分よりプロヴァンス大学 Salle des Conseils Aux Schuman において行われた会議には、グローバルCOE から、拠点リーダーの佐藤教授と重見の2名が出席し、プロヴァンス大学からは国際交流担当理事である ABRIC 教授と国際交流事務局責任者の KHELLFA 女史、さらに言語・文学・芸術学大学院コース長の FANLO 教授、I' U.F.R. LACS（文学・芸術・コミュニケーション・言語科学コース）長の STOFFEL 教授に加え、日本関係を専門とする教員として DELTEIL 准教授（日本文学）、CONDOMINAS 准教授（社会学）の6名が出席した。

会議はプロヴァンス大学とグローバルCOEプログラムとの間に学術協定を締結することの重要性を強調する ABRIC 理事の挨拶に始まり、続いて佐藤教授から2007年に始まったグローバルCOEプログラムの活動状況について、国際研究集会を中心としてイギリス、アメリカ、カナダ、シンガポールなどの大学と学術交流を行っていること、現在グローバルCOEプログラムでは博士後期課程の大学院生が3年の標準年限内で課程博士論文を提出することができるよう、論文賞の創設や海外派遣事業を推進していることなどの説明があった。

その上で、グローバルCOEプログラムより次の3点をプロヴァンス大学に提案した：1）プロヴァンス大学とグローバルCOEプログラムの共催による研究集会やシンポジウムを実施する、2）プロヴァンス大学からグローバルCOE への研究者の招聘、3）両大学に在籍する大学院博士後期課程学生の交流。以上の提案に対して、プロヴァンス大学の参加者から肯定的な反応があり、グローバルCOE からの提案を関係する教員に連絡し、できるだけ早く両大学間の学術協定が実効力を持つようプロヴァンス大学側の体制を整備することが確認された。

われわれが訪問した時期は、ちょうどプロヴァンス大学の総長選挙の時期にあたっており、今後フランス側の受け入れ体制についても再編される可能性を含んでいる。また、夏の長期休暇前の時期であったということもあり、フランス側での教員・学生への周知期間が必ずしも十分とられたともいえない。長期休暇が終了し次第話し合いを再開する必要があるだろう。グローバルCOE としても本年度中より、プロヴァンス大学と名古屋大学の間での学生交流を開始することを望んでいる。

（技術統括責任者・電子テクスト学）

スタッフ紹介

事業推進担当者

法・思想グループ

◉ 森際康友 教授　チーフ Morigiwa Yasutomo

法解釈は、大陸法系諸国では条文の解釈と考えられがちだが、裁判官による「法解釈」の用法を注意深く観察すると、具体的事件における正しい解決の意味で用いていることが多い。英米法系では、“find the law” と言われる ius 発見のことである。それは条文解釈をも手段として用いる、text と context とを一体化させた対象の解釈であり、その構造と機序の解明は法学、解釈学、哲学、政治学など、多様な分野にとって重要な課題である。

● 阿部泰郎 教授　Abe Yasuro

テクストにおいて〈聖なるもの〉は如何に顕れるか？それを、日本中世の宗教テクストについて探究する。寺院経蔵などのアーカイブスには、厖大な「聖教」と呼ばれる仏教および神道等のテクストが他の典籍と共に伝えられる。それらを教義論や注釈等の思想テクストと修法次第等の儀礼テクストの両側面から、その体系と機能を復原的に考察しつつ、通時と共時の双方から解読し、それらの生成過程とその機構を解明することを目指す。

● 長尾伸一 教授　Nagao Shin-ichi

主に18世紀ブリテンの社会、科学思想史を対象領域として、思想史に関わるテクストを言説としてとらえ、その形成と解釈の問題を研究する。テクスト生成についてはテクスト生成における発話行為の性質と、生成の場のさまざまなコンテクスト、言説空間の構造と権力の関係を、啓蒙期の公的言説空間を実例として考察している。解釈の問題としては、初期近代の言説空間におけるマニュスクリプト資料と刊本の機能を取り上げる。

● フォヴェルグ・クレール 外国人教師　Fauvergue Claire

「自然の解釈」という科学がベーコンに考案され、ディドロが著者となる『自然の解釈に関する思索』において一新された。解釈は、論理学と歴史学と異なり、むしろライプニッツにおける記号的認識の観念に一致する。本プログラムにおいて、ディドロの解釈の観念の特性とそれに係わってくる概念について考察し、ライプニッツとディドロの哲学における自然と解釈の関係の問題とその意味を重視する。

台湾国立清華大学の訪問

国立清華大学（台湾）の陳文村学長および人文社会学部長張維安教授を含めた6名によるグローバル COE プログラム『テクスト布置の解釈学的研究と教育』拠点への訪問があり、2008年7月10日15時より文系総合館2階第1会議室にて懇談会をもちました。
清華大学は卒業生に3名のノーベル賞受賞者（物理学賞2名、化学賞1名）を輩出した台湾屈指の国立大学であり、今回の視察は名古屋大学への表敬訪問の機会に、人文系の拠点との交流を持ちたいという清華大学の強い希望により実現したものです。

グローバル COE プログラムからは、佐藤彰一教授（拠点リーダー）、釘貫亨教授（教育担当サブリーダー）、重見晋也准教授（技術統括責任者）と野田ゆかり（運営コーディネーター）の4名に加えて、文学研究科より和田壽弘文学研究科長と柳総務課長（文学研究科担当）が対応しました。懇談会は陳学長と和田研究科長の挨拶に始まり、佐藤教授と張教授との間で日本と台湾における人文学分野の研究・教育体制について意見交換をしました。懇談の中で清華大学からは、理工系中心の大学ではあるがアジア地域の人文社会学的研究を推進するための研究所を設立し人文学分野の研究教育にも力を入れているとの現状が説明されました。グローバル COE プログラムからは、本拠点が人文科学分野で選ばれた12拠点のうちの1つであること、本プログラムが博士後期課程に在籍する大学院生の教育に重点を置いたプログラムであること、地域に限定した研究ではなくテクストに対して学際的な視点から研究拠点形成を推進していること、論文賞の創設や海外派遣事業などにより課程博士論文の執筆支援を強力に推進していることなどを説明しました。
懇談の最後には研究教育交流の可能性を確認し、参加者一同が両大学の今後の発展を祈念して握手を交わしました。

大学院学生説明会について

グローバル COE では去る7月9日㈬に大学院説明会を開催し、今後の教育事業（研究アシスタント募集、グローバル COE 論文賞、後期授業）について説明を行ないました。これらの情報はグローバル COE の Web ページにも掲載していますので、アクセスしてご覧ください。

グローバルCOE論文賞（第1回）の募集について

グローバル COE では博士後期課程大学院生による研究論文を募って選考を行い、優秀な論文に対して「グローバル COE 論文賞」として顕彰し、2009年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。第1回の募集については9月8日に締め切られ、多くの応募がありました。審査の結果については Web およびメーリングリストで発表します。

大学院生海外派遣事業（第2回）について

第1回に続いて2008年度第2回となる大学院生海外派遣事業の募集を行い、2008年9月24日に募集を締め切りました。多数の応募ありがとうございました。審査は書類審査と面接審査の2段階に分けて行います。最終的な審査結果は、グローバル COE 論文賞と同じく Web およびメーリングリストで発表します。

事務局からのお知らせ

故天野政千代教授の文学部葬

故天野政千代教授の文学部葬が8月30日㈯シンポジオンホールにて粛やかに執り行われました。巻頭にもありますように、グローバル COE プログラム拠点リーダーの佐藤彰一教授が哀悼の意を込め弔辞を述べました。天野教授は教育推進室室長として本グローバル COE プログラムに多大な貢献をなされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

グローバル COE プログラム後期授業の予定

- **テクスト布置解釈学原論** …… 松澤和宏教授
  ［集中］12月24日2–5限（129講義室）、12月25日2–5限（129講義室）
  2009年1月8日2–5限（128講義室）、1月9日2–4限（129講義室）
- **テクスト布置解釈学各論 V** …… 重見晋也准教授
  火曜日5限（129講義室）
- **テクスト布置解釈学各論 VI 演習** …… ゴーベル・ゼーン准教授
  金曜日4限（総合308/309室）
- **テクスト布置解釈学各論 VII 演習** …… 古尾谷知浩准教授
  ［集中］10月3日4–5限（総合310室）、10月17日4–5限（総合310室）
  10月24日午後・25日（現地調査）

※ Web のシラバスでもご確認下さい。
ジャック・ダララン氏（元テクスト史研究所（IRTH）所長／フランス国立科学研究センター主任研究員）が11月4日～28日に招聘研究員として滞在し、授業と講演会を行う予定です。詳細が決まり次第メールおよびホームページでお知らせします。

「名古屋大学ホームカミングデイ」パネル出展

10月18日㈯に開催される第4回名古屋大学ホームカミングデイでは「最先端の研究成果及び教育プログラムの紹介」のコーナーと文学研究科内にパネルを出展し、本グローバル COE プログラムの活動を一般の方にも説明する予定になっています。これまでに発行した印刷物なども展示・配布しますので、皆さんのご来場をお待ちします。

SITES II HERSETEC
国立大学法人 名古屋大学 グローバルCOEプログラム
テクスト布置の解釈学的研究と教育 No.3
発行日　2008年9月30日
発　行　名古屋大学大学院文学研究科

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOE事務室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-747-6450
名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号 名古屋国際センタービル15F
TEL 052-587-1710 FAX 052-587-1709
web ● www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp　e-mail ● bureau@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp